908586

特殊研Ｂ－１６５

一般研究報告書

コミュニケーション障害における子どもへの教育的援助

－関係への援助と言語指導－

（平成１０年度～平成１３年度）

平成１４年３月

独立行政法人
国立特殊教育総合研究所
聴覚・言語障害教育研究部

序

本報告書は、平成10年度から13年度にかけて言語器質障害教育研究室で実施された一般研究の成果をまとめたものである。

標題にある「コミュニケーション障害における子どもへの教育的援助」については、平成6年度から9年度にかけて実施された研究テーマを引き継いだものである。当時は、サブテーマとして「障害状況における関わり手の役割と言語指導」を掲げ、例えば子どもと教師間におけるコミュニケーション上の問題は、子どもあるいは教師の一方の問題ととらえる視点よりも、子どもと教師の両者間の問題即ち関わり合い方の問題であるととらえる視点の重要性を指摘し、その関係改善のための方策等について検討を行った。

今回は、そこでの成果を踏まえ、サブテーマを「関係への援助と言語指導」とし、二者間の関係をよりよく援助するための方策、さらにそれと言語力との関連等について検討することを目的として研究を進めたところである。

子どもと関わり手との関係に着目し、その適切な有り様を探ることは、言語障害のある子どものみならず、広く子ども全般にかかわる現代的な課題でもある。したがって、こうした関係論的な見方は、子どもの発達や人間関係そのもののとらえ方に新たな視点を与えてくれるものと考えられる。

こうした流れの中で、とりわけ本研究は、言語障害教育の領域における子どもと関わり手（教師）の有り様について、指導日記等に現れた関わり手の内省に関する記述の分析に重点を置いて進められた。その過程では、「関係」概念の整理を行うとともに、記述分析の視点等に関する知見が得られ、関係改善のための具体的な援助方策を検討することができた。また、研究協力者には、日々の教育実践における指導日記等の分析をしていただき、子どもと関わり手との関係を援助していくための様々な情報を事例として提供していただいた。本報告書は、こうした研究の足跡をまとめたものである。

言語障害をコミュニケーション障害としてとらえ、子どもと教師、あるいはそれを取り巻く周囲他者との関わり合いを追究する関係論的立場からのアプローチは、更に視点を変えるなどして今後も継続して研究を進めていく必要があるが、研究の一里塚として、本報告書が学校等における実践の一助になれば幸いである。

今回の研究にご協力いただいた研究協力者や研究協力機関に深く感謝申し上げるとともに、更なるご協力とご助言が得られることを祈念する次第である。

平成１４年３月

独立行政法人
国立特殊教育総合研究所
聴覚・言語障害教育研究部長

宍　戸　和　成

研究組織

所内研究分担者

菅原廣一　（前聴覚・言語障害教育研究部長　平成１０年度－平成１１年度）
宍戸和成　（聴覚・言語障害教育研究部長　平成１２年度－平成１３年度）
松村勘由　（言語器質障害教育研究室長）
牧野泰美　（言語器質障害教育研究室主任研究官）
小林倫代　（言語機能障害教育研究室）
久保山茂樹（言語機能障害教育研究室研究員）

研究協力者

青山新吾　（備前市立伊部小学校）
安部満明　（松江市立古江小学校）
岩塚政司　（岐阜県立岐阜希望が丘養護学校）
菅野幸美　（世田谷区玉川保健福祉センター）
堀　彰人　（千葉県特殊教育センター）
山部祐子　（藤沢市立鵠洋小学校）

研究協力機関

鎌倉市立御成小学校
虹の子会ダウン症候群児療育センター